



巣立ちの練習

ぶかぶか漂う
第30回



うちではたいして咎めることもなく、今回も家族に笑われて終わる話だと思っていました。しかし、臨海学校から数日後、次男は学校で事件を起こしました。今度は友達の心を傷つけることをしてしまいました。その友達とご両親には大変申し訳なく、本人と私と夫で謝罪に伺いました。本人は理由を言いません。先生は臨海学校からの一連の流れで思いを巡らせ、本人と対話を続けてくださいました。

次男は「仲間」というものに人一倍強い憧れがあります。小学生が放課後に友達と自由に遊べないバンコクでは、常に物足りなさを感じました。転勤者の子供たちですので、友達は常に入れ替わり、自分自身もまた帰国します。臨海学校を機に、もっと結束したかったのですが、それを皆で集まって読んで、仲間との絆を描いた漫画を

うちではたいして咎めることもなく、今回も家族に笑われて終わる話だと思っていました。しかし、臨海学校の最小単位は家族であることを恥ずかしいとは何か、が違うのか。それから海外にいると、日本人ではないインター校にいると、恥ずかしいとは何か、が違うのかかも知れませんね。でもほとんどが日本人ではありません。だから長男は「見に来るのは？」と笑うだけです。

その長男、高校の最終学年をタイでほぼ一人暮らしをすることに。夫が日本帰任となり、中学三年生の長女と小学六年生の次男も日本に帰ります。私ができるだけ日本とタイを行ったり来たりすることで、なんとかこの一年を乗り切りたいです。

「子供の習い事の見学はしない」という話を前回書いたのですが、最近は見に行っちゃうんですよ、高校三年生になつた長男のバレーボールの試合とか。まもなく見られなくなると思ふと、子供の応援に行けるのは、なんて幸せな時間なのかと思います。

日本にいたら、親が応援に来るなんて恥ずかしいからやめてと言っていたかも知れませんね。でもほとんどが日本人ではありません。だから長男は「見に来るのは？」と笑うだけです。

長男の巣立ちの気配にしみじみしたいところですが、そうはいかない実生活。次から次へと次男がやらかします。先日、次男が通う日本人学校で宿泊体験学習の臨海学校があったのですが、『ONE PIECE』の漫画本を、なんど二十冊も持ち込んだそ

う。速攻で先生に見つかり、取り上げた先生がその後の行程、二十冊も持ち歩かねばならないという…。夜は三人ずつの部屋だったのですが、「消灯後の夜十時、男子は全員、うちの部屋に集合だ!」という号令をかけたのも次男です。これは女子の密告により失敗に終わりました。だれも傷つけないワルさについては、

間意識を共有したかつたのではないか。しかし、次男が勝手に期待するよりも友達はドライなことが多く、その度にがっかりし、時に裏切られたかのように感じるのはないか。

次男が感じる仲間への飢え。転校ばかりさせてきた責任を感じます。しかし彼の友達に対する表現方法は明らかに間違っていました。そのように育ててしまつたのかと、私自身がショックで打ちのめされました。

親の役目は子供を自立させることだとすれば、それは思っていたよりあつという間。焦りさえ感じてきます。手元にいる間に、もつともっと学んでくれよと心底思います。



文・写真
小宮華寿子
二男一女の母で
編集者、「ラジオの手しごと」
(メイツ出版)著者、ジュエリーリビング
ヴィンテージの店「メルカジーニョ」
(https://mercadinho.net)代表。



イラスト・
デザイン
寺沼麻美
切り絵作家、時々
デザイナー。「ゆ
らゆらゆれる北欧風手作りモビ
ール」(ネコ・パブリッシング)を監修。